白門みえ

大正時代の母校

中央大学学員会
三重支部ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ
http://www.hakumon-mie.jp

支部長挨拶

昭和３６年法卒　小川　益司

学員会三重支部の歴史を紐解くと、昭和２４年（１９４９年）に中央大学学員会三重支部発足していますから今年で６４年になります。

この第１回にご出席された先輩で今もご健在で、第一線でご活躍されている前支部長の田村憲司さんがいられますが、その他の方（速水、中野、三輪、吉住、阪さんら）はすべて幽明境を異にしていられます。それ程の長い歴史のある三重支部であります。

我々の母校の中央大学が明治１８年に英吉利法律学校として創設されてから１２５周年ということで、３年前には盛大な式典が母校で催され、三重支部代表として私が出席しました。

今や秋の伊勢路の風物誌ともいえる第４５回全日本大学駅伝大会も今年は１１月３日に行われます。昨年は９位（１昨年８位）で６位までのシード校にははいれませんでしたので、去る６月３０日の関東地区選考会があり、７校までが本戦に出れますが、中大は参加校２０校のうち、１５位の惨敗で１０年連続本戦への出場はかないませんでした。毎年父母連絡会三重県支部の皆さんや学員には沿道やゴールでご熱心に支援をしていただいており、近年は愛知、大阪等近県から多くの父兄が応援に来てくれますのに極めて残念であります。

ちなみに、今年の第８９回箱根駅伝も往路５区で、ゴールの芦ノ湖まで後１キロで大ブレーキの転倒、立ち上がり不能でまさかの棄権、涙の幕切れでした。従って復路はオープン参加で、惨憺たる状況でした。予選会は１０月１９日です。よもや予選会も落ちることはないと思いますが、今年から新たにコーチ２名を招聘して、新しい体制を作りつつあります。

箱根駅伝は単なる大学対抗駅伝ではありません。今や国民的な一大イベントで正月を彩る正月行事です。私が在学中の昭和３０年代は中大６連覇で、司法試験、公認会計士試験もダントツ１位で中大が一番輝いていた頃でした。

学員の皆さんもご承知のことと思いますが、昨年暮れから今年にかけて、理事長兼学員会会長久野修慈さんが中央大学横浜山手中学校・高等学校（今年度から中央大学附属横浜中学校・高等学校に改名）の中学校の入試に知人の孫を不正に入学させたとして朝日新聞等で２度に亘り掲載されました。

その後久野理事長は辞任されました。５月１８日の定時協議員会・定時学員総会で学員会会長職は再任されたのですが、その選任に瑕疵があったとして、久野会長の職務停止の仮処分申請と決議無効確認の訴訟が提起されています。

私どもの母校中央大学の著しいイメージダウンとなっています。これらの責任をとって福原総長が６月３日総長職を辞任しています。

内外共に中大も大変な時を迎えていますが、各種の冊子によると名門中央大学の就職、各種国家試験等の実績は躍如たるものですが、少子化のなかでこれに胡座をかいていては中央大学は取り残されます。今後とも教学と我々学員が力を合わせて母校中央大学発展のため努力をしていく必要があります。

最後に、学員諸兄の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

齢七拾にして思うこと

昭和４０年法卒　畑山　智明

中大の級友にして弁護士の畏友高木国雄（42年卒）著の上梓されたばかりの「この国のために-川路聖謨」（鳥影社）をいただき、拝読しました。これは川路聖謨（としあきら）の生涯を丹念に描いた２巻の労作です。幕末に通商を迫って来航したロシアのプチャーチンと粘り強く交渉を続け、日露和親条約の調印にこぎつけた立役者です。互いに国益をかけて対峙しながらも、プチャーチンを「真の豪傑」と認める川路は、相手側からも「良識、機知、慧眼、練達の武士」と称えられる人物であった。いまこのような人物が我が国にこそ必要という作者の思いが伝わってくる本です。学員にもお薦めします。

また、岐阜・岩村藩の出身で、幕府の昌平校の総長であった幕末の儒学者佐藤一斎の「言志録」の一節に

「少くして学べば、
　即ち　壮にして為すことあり。」
「壮にして学べば、
　即ち　老いて衰えず。」
「老いて学べば、
　即ち　死して朽ちず。」

という有名な言葉がある。これは小泉総理が衆議院での「教育関連法案」の審議で述べたことでさらに知名度が上がったのである。

翻って我が身を省みるに、そのいずれにも該当しないことを　恥じいるのみです。

然しながら　五十歳を越えてから、妻と二人で米と豪のカイロプラクティックの大学に学び、今はその取得した資格とテクニックで、すこしばかり社会に貢献させて貰ってる気がしていると自負している次第です。

腰痛・膝痛の患者さんのみならずメディカルのほうでも困ってみえる患者さん方も施術が終わるとニッコリと心からも笑顔で帰って行かれる姿を見ると、何にも変え難い喜びと幸福を感じる毎日である。中大学員も数名来ていただいており、今昔の大学のことについて語り合えるのもまた楽しいひと時である。

これからも息子、妻ともども情熱と健康の許す限りこの仕事を続ける覚悟です。

学員会三重支部の益々のご発展をお祈りします

人間万事塞翁が馬

昭和５４年法卒　山口　千代己
（三重県教育長）

「日本の真ん中、東京で学びたい」想いと、「男はつらいよ」の世界に憧れ大学を選びましたが、結果は一浪して中央大学へ入学しました。しっかり勉強して名誉挽回だと入学後は読書三昧の生活を送り、大学の友人が下宿に来るとその蔵書量に驚いたものです。

当時、大学は文部省の支援を受け私立大学で初の都心から郊外へのキャンパス移転を計画しますが、学生は移転反対の抗議行動に、当局はロックアウトで対抗しました。学生運動の名残りか生協の２階も封鎖され、眼前での「中核」と「核マル」のゲバ棒での流血惨事と、機動隊の配備にはこれぞ大学と妙に感心もしました。　結局、４年間のうち２回がレポート提出による単位修得で卒業しました。そんな中、法職講座受講や国家公務員上級試験委員原田鋼氏のゼミに入るなど精力的に勉強しましたが、休講時は学生街の喫茶店で有名なレモン、神田古本街、岩波ホール、東大の聴講等へも出かけました。もちろん大学近くの「満里」等の雀荘で徹夜麻雀をしたのも懐かしい思い出です。大学が街に溶け込み、仕事帰りの銀行員が水島廣雄氏の信託論を聴講する姿に恥ずかしくもありました。

多くの友人が山手線や中央線の沿線に住む中、寅さんの町で人情味あふれる葛飾で４年間を過ごしました。当時、下宿裏の小岩高校に通学する大竹しのぶに会いたい、デートをしたいと後を追いかけたりしました（中にはデートした者もいました）。

就職は東京で農協系統の中核金融機関から内定、研修まで受けましたが、田舎の長男、教育実習での生徒交流等から高校教員として帰省しました。教員では県内普通科で初めて１年からコースを設け職業教育による進路保障、部活指導、磯野貴理子さんを３年間教えたことが印象深いです。

５年間の教員生活後、昭和５９年校長から「教育委員会でなく県総務部へ異動。教員では初めてらしい」との内示を受けました。これを機に県庁白門会へ入会させてもらい多くの出会いに恵まれますが、当初は教育職のため暫くはお客さんでした。業務は田川県政の集大成「三重県史」編纂でしたが、県内６９市町村の名望家宅の蔵にある歴史資料を埃にまみれ調査等しました。近代編の第１巻の発刊時は流石に感無量でした。

８年後、教育委員会へ異動。新しいタイプの高校等の教育改革、北川県政では教育行政システム改革担当、教職員組合の勤務時間内の組合活動の適正化、教育職初の企画員・企画TM就任、野呂県政では学校経営品質向上活動と、高校再編活性化基本計画による高校統廃合等の課題に地域住民や関係者から叱咤激励、協力を得て教育行政に携われました。

最後は高校長へ転出かと思いきや、24年には鈴木県政でスポーツによる地域活性化、国体開催等に向けた新設の地域連携部スポーツ推進局長に就任、25年度から県教育長として三重の子どもたちの教育に一意専心で取り組んでいます。

振り返れば、異例の職業人生を歩いていますが、官民学を問わず白門出身で会話が弾み、先輩の指導も得られました。今後も一期一会を胸に白門会員との出会いを大切に過ごしてまいりますのでよろしくお願いします。

三年目の防災対策

昭和５７年法卒　稲垣　司
（三重県防災対策部長）

平成二三年三月一一日、東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）発生のその日は、三重県庁恒例の定期人事異動の内示の日でしたが、地震発生に伴い、内示は翌日へと延期されました。当時私は伊勢県民センター所長の任にあり、地方災害対策本部長の立場で職場に泊り込んだ翌朝、電話で受けた内示の中身は、「防災危機管理部（現在の防災対策部）へ異動させる」というものだったのです。

その日から「防災、防災」に明け暮れる日々。対策の立案や実践に加え、現実の災害対応から啓発活動に至るまで。文字通り目の廻る忙しさの中で、今、防災対策部三年目を迎えたところです。

俗に「自助」「共助」「公助」と言いますが、中でも、防災対策上最も重要な要素は「自助」です。ところが、東日本大震災を受けて一気に高まった県民のみなさんの防災意識も昨今は目立って落ちています。将来「南海トラフ巨大地震」の襲来が確実視される中、この現実は大いに憂慮すべきことです。行政がどんなに防災対策を講じても、たとえば、津波が襲来したとき「大丈夫だよ」と悠然と身構えられてしまっては、どんな対策も功を奏しないからです。ですから、三重県の防災対策の重要テーマの一つは「県民の防災意識の向上」なのです。

唐突ですが、私の学生時代の強烈な思い出について語ります。

大学二年のとき（昭和五四年）、昭和二四年に東北本線で起きた列車転覆事件（松川事件）の赤間元被告を講師に迎え、講演会が中央大学において開催されました。松川事件というのは、警察官に脅され続けた「九歳の少年（赤間元被告）が吐いた「自白」に端を発する冤罪事件です。

事件から三〇年が経過したにもかかわらず、顔面を紅潮させ、口角泡を吹くようにして当時の取調べを非難する講師の姿は、今も強く私の脳裏に焼きついています。

何が言いたいかというと、生き地獄とも言うべき赤間さんの体験は、三〇年の歳月を経てもなお決して彼の中で風化するものではなかったのだということ。逆に言えば、彼のような過酷な体験をしなければ、意識というものはすぐに風化してしまうものなのだろう

か、という疑問なのです。

そして、「そうではない」と私は言いたいのです。

翻って、このことを防災意識に置き換えてみれば、強烈な実体験に裏打ちされない意識はたやすく風化する、というのであれば、被災体験を味合わなければ、三重県民の防災意識の向上は望めないことになってしまいます。冗談じゃない。

そんな悲劇を体験しなくても、防災意識を向上させることは絶対にできる、と私は確信します。そう信じて、今も私は、防災対策に取り組んでいます

豪雪地帯

昭和６３年法卒　井上　卓也
（百五銀行支部）

平素は中央大学学会三重支部の皆さまに大変お世話になり、誠にありがとうございます。

僭越ながら、受験日の思い出をお話させて頂きます。

三重県の片田舎から大学に向かう朝、母親から『東京はコンクリートのジャングルだから、田舎の土の温もりを忘れずにね』と言われ、若かりし私はその言葉を胸に抱き、また空虚なコンクリートを想像しながら東京へ。新幹線からみえる富士山、東京タワー、ちらりと見える皇居のお堀、東京駅、そして聳（そび）え立つオフィスビル群、都会に対する高揚は自然に増加していきました。

翌朝新宿から多摩動物公園前へ……目を疑いました。それは“都会に対する高揚は自然に増加”ではなく、単に“自然が増加している”だけに変貌していきました。しかも受験日当日は大雪で校舎に向かう山道はほぼ越冬隊状態、さらに山道横には雪に覆われた“まむしに注意”の看板…『どこがコンクリートのジャングルや！』と落胆していきました。

しかし、その絶望感が一転したのは、山道から抜けてヒルトップに入った時でした。ヒルトップから見た壮大なキャンパス、白い校舎と雪のコントラスト、逞しくとも想える下から突き上げる風、素晴しい、これが東京の大学か…と感銘を受けたことが今も脳裏に焼きついています。

そんな感銘を受け入学したのにも係わらず、成績は惨憺（さんたん）たるもの。就職時の役員面接で『君の成績は目の検査みたいだな』と言われたことを今も思い出す。

〈各教科がA、B、C、D（不可）で評価され、大半がCであった〉

学友は生涯の財産

平成６年経卒　海野　真義
（百五銀行支部）

卒業してから、もうすぐ２０年になります。思い返せば八王子のキャンパスで過ごした学生時代の思い出は、今も色あせることなく私の心に刻み込まれています。

その思い出の中で、いまも私の大きな支えになっている大切な財産があります。それは友人と過ごした時間です。

学生時代には、ゼミ、テニスサークル、アルバイト等を通じて、たくさんの友人と出会うことができました。その友人達とは学業だけでなく、毎夜ともに語り、飲み、歌い、打ち、過ごした時間は、今では何物にも代えがたい貴重な財産です。

その貴重な学生時代を共有した仲間は、その後の人生においてもかけがえのない仲間となりました。そして、一生涯の友人にも出会うことができ、お互い家族をもった今でも当時と変わらず交流が続いています。

また、大学卒業後も「白門会」を通じて、同じ大学の諸先輩方と交流することができ、交流の場がさらに広がっていることを誇らしく感じています。

現在、私は百五銀行で勤務していますが、当行にもたくさんの「白門」出身の先輩、後輩がいられますし、日々の業務でも「白門」の諸先輩方にお会いすることが多々あり、とても力強く感じます。

これからも「白門」の繋がりを大切にし、後輩に誇れる先輩でありたいと思います。

学友会の一員となって

平成１１年理工学部卒　武田　健司

平成１１年理工学部土木工学科卒の武田です。卒業後は某住宅メーカーにて建築営業・現場監理の実務経験、１級建築士の免許取得の後、現在は四日市市内で建築設計事業、建築資材販売施工事業、リノベーション事業を手がける武田技研㈱を経営しています。不景気といわれる現状において元気な会社を維持できているのは中央大学の大先輩方をはじめとする人脈によるものと思っております。

学生時代、海が大好きな私は中央大学サーフィン部に所属し、学業の方では海岸工学（海岸線の浸食・津波等の解析）を専攻していました。サーフィン部は非公認でしたが、練習はかなり厳しいものでした。飲み会も相当なものでしたが・・。水道橋理工学部校舎に通った時間よりも九十九里海岸等にいた時間のほうが長かったんじゃないかなと思います。卒業必要単位はぎりぎりで何とか卒業できた私ですが、中央大学の部活仲間と、体育会系の経験がその後の支えになっています。

さて、卒業後私が肌で感じることは、新卒の方々を取り巻く社会・経済環境はまだまだ改善されていないということです。特に若い世代の方の価値観の違いもありますが、退職・転職があたりまえのようになってきているのではないでしょうか。そのような情勢の中で、中央大学は白門会三重支部、土木工学科白門会等、多分野で活躍されている先輩方と交流の機会があり視野を広く持つことができるすばらしい大学です。私も先輩方からアドバイスを頂き大変助けられています。

今後共、白門会の一員として皆様のお役に立てるようにと思っています。

法科大学院ってどんなところ！？

平成１９年法卒
県庁支部　川本　大

現在、三重県県土整備部流域管理課で河川管理業務をしております。三重県に入庁した昨年から県庁白門会に入会させていただきました。多くの先輩方が三重県の最前線で働いていることを知り、自分も白門の名に恥じぬよう、仕事をしていきたいと強く感じています。

さて、今回、私が白門みえの原稿の執筆を依頼されたのは「法科大学院」についてのことでした。「法科大学院」と言えば、法曹養成機関であり、現在、公務員として働いており、さらに中央大学法科大学院に進まなかった私が「法科大学院」について語ることは気がひける気持ちになるのですが、少しお付き合いいただければと思います。

法学部では法律学科に所属し、都内の某法科大学院に進むことになりました。中央大学の法科大学院を選択しなかった理由は、第一には縁がなかったこともありますが、第二には他の学校の校風に触れてみたいと思ったことに理由があります。実際に入学したことで、他校の良さだけでなく、中大の良さを改めて実感することもできました。

前置きが長くなりましたが、私が進学した法科大学院では１学年３００人弱で、９割が法学未修者として入学する大学院で、いわゆる受験対策も行わない大学院で、社会人の方も多く、様々なバックグラウンドを持つ人がいました。授業は、ほぼ全科目でソクラテスメソッドの形で、第一線で活躍する教授や実務家から指導を受けることができ、ここで身につけた法的思考力は公務員となった今でも役に立っています。

そんな法科大学院の一日はどういうものか、と聞かれると、一言で済ますことができます。「単調」だと（笑）。朝1限から授業に出るために大学院に向かい、夜は自分の勉強する自習室が空いている２２時まで自習室で大学院の予習、復習、及び司法試験に向けた勉強を行うというものです。その当時はその単調さにつらさを感じることもありましたが、今思えば、好きな法律のみやればいいというとても幸せな時間だったと思います。

現在、法科大学院の削減や廃止が叫ばれていますが、制度に問題があれど、そこで学んでいる学生は本当に一生懸命に勉強しているので、法曹であろうがなかろうが法科大学院の出身者にもし出会うことがあれば優しく接していただければと思います。

法科大学院はまだまだ少しでもみなさまに法科大学院がどのような場所か伝えられたかには一抹の不安がありますが、中央大学学員会三重支部の催しがあれば積極的に参加させていただきたいと思いますので、気軽に声をかけていただければと思います。拙い文章ですが、お付き合いいただきありがとうございました。

訃報

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

三重支部副支部長　佐々木　龍夫
８月５日　逝去

人事異動

４月１日
三重県教育長　山口　千代巳
三重県地域連携部長　水谷　一秀
６月２１日
百五銀行取締役北勢支社長　後藤　悦夫
百五銀行理事・営業統括部長　内藤　誠
百五銀行営業戦略部長　木村　幸正
百五銀行大阪営業部長　大杉　充弘
６月３０日
父母連絡会三重県支部長　川出　喜則

編集後記

巨大な国家的なイベント、夏季オリンピック・パラリンピックが５６年振りに東京で決まった。これまで名古屋、大阪、東京での失敗を乗り越えての成功である。直前の福島第一原発の汚染水漏れの懸念もあったが、「世界で最も平和で、安全な都市」「強固な財政力」「復興、開催能力、都市の成熟、賛成７割の支持率」等の魅力のアピールが功をを奏したと言えるのではないか。

オリンピックが日本再興の原動力となろう。その経済波及効果は少なく見積もっても3兆円、雇用は１５万人と試算されている。さらに観光振興、道路、鉄道などのインフラ設備の整備も進む。また、今後多くの外国人が訪れるし、日本の文化、安全、先進性などの魅力をアピールするチャンスである。

東京誘致のスローガンＤＩＳＣＯＶＥＲ ＴＯＭＯＲＲＯＷ（未来をつかもう）をオリンピックだけでなく、広く社会・経済で実現して欲しいものです。

本学のオリンピックの小史を少し記すると、主な五輪出場者は１９３６年ベルリンで村社講平５０００、１０００ﾒｰﾄﾙで４位、５２年ヘルシンキで石井庄八レスリングで金メダル、５６年メルボルンで笠原正三、池田三男が金、６０年ローマで藤本達夫が８００ﾒｰﾄﾙ自由形リレーで銀、開田幸一がメドレーリレーで銅、田辺清がボクシングで銅。１９６４年東京では本学の選手、コーチ合わせて４４名が参加した。渡辺長武（レスリング）、岡野功（柔道）、桜井孝雄（ボクシング）が金。円谷幸吉（マラソン）、森山輝久（バレーボール）銅と中大の全盛の時である。

その後も各オリンピックで活躍された。近くは競泳でも中村真衣、田中雅美等が水泳日本でメダルを獲得して、中大水泳を世に知らしめた。

２０１２年ロンドンでは飯塚翔太（２００ﾒｰﾄﾙ）、館野哲也（４００ﾒｰﾄﾙハードル）、石橋千彰（競泳２００ﾒｰﾄﾙリレー）、銀メダルを獲った千田健太（フェンシング）の５選手（現役学生３，学員２選手）が出場した。かように伝統ある「スポーツにも強い中大」も近年早稲田、慶応、明治、法政、青山等の大学にも劣ると思うのは私だけではないようである。

編集者・文責　小川　益司